青森タイムトラベル

第3回

歴史のまち浪岡――伝説・遺跡・中世の里

【問合せ】
市史編さん室（☎017―732―5271）

今回は、『浪岡町史』（平成16年度完結）に記述された歴史をみましょう。

伝説の残る土地柄

梵珠山の火の玉　浪岡は北に梵珠山をのぞみ、その麓の集落は大釈迦です。この地名だけでも霊場のような土地柄ですが、毎年旧暦7月9日から10日の未明にかけて「御灯明」と呼ばれる霊光が見えるという言い伝えがあり、今も「火の玉探検」のイベントを行っています。

写真①　隠れた名所・美人川公園

梵珠山は、平安時代末期の仏教波及にともなう修験の聖地とされ中世の時代の行政単位である「外浜」（青森平野から陸奥湾西岸側）、「西浜」（日本海側）、「田舎郡（津軽山辺郡）」（津軽平野南部）などの境界・分水嶺となった場所です。

美人川伝説　また、羽黒平地域には清水で顔を洗うと美人になるという伝説が残ります（写真①）。これは、『津軽俗説選　後後拾遺』（江戸時代の記録）に記述された内容をもとにしたものです。

京都の公家の姫が「伴侶となる男性は外浜にいますよ」との観音様のお告げによってはるばる津軽まで来て、明日は外浜という時、清水で顔を洗ったら麗人となり、その小川を美人川、お歯黒（羽黒）に使った楊枝は「楊枝杉」と呼ばれるようになったとされます。次の日、外浜で道に迷い炭焼きの家に一泊し謝礼に金の塊をあげると、その若者・藤太は「ここには、こんなものたくさんあるよ」といって、二人は夫婦になるという物語です。

この物語（伝承）の本質は、平安時代後半に、京都の勢力（国家）が鉱産資源の開発のため地方に進出し、津軽も内国化する動きとみてとれます。

土地に残る伝説を調べると、そこには歴史的事象の存在を裏付ける「言い伝え」になっていることがあります。

遺跡の宝庫

浪岡地域には、早期の細野遺跡をはじめとする縄文時代の遺跡が多数存在します。

平安時代の大開拓　特に、平安時代になると、雨後の筍のように遺跡が増えだし、現在の東北縦貫自動車道や国道7号バイパスが走る丘陵上は、ほとんどが平安時代の集落になっています。

これは、気候の温暖化に伴って稲作農耕が進展したことと、東北南部から移住した集団があったことによると想定しています。鎮守・浪岡八幡宮は坂上田村麻呂によって延暦年間（782～806）の創建と伝える神社ですが、まさにこの年代以降に集落は増加し、青森平野の丘陵でも同じ状況です。

写真②　浪岡地域から出土した須恵器大甕

遺跡は竪穴や掘立柱の建物と井戸・畠・墓からなる集落として成立し、製鉄、鍛冶、木工、窯業（須恵器という焼き物で五所川原地域が中心）に関連した遺物、そして墨書された土器なども多数発見されています。特に、浪岡地域では須恵器の大甕を出土する遺跡も多く（写真②）、生産力の増大を感じることができます。

道の駅・アップルヒルの北に位置し、国道7号バイパスを迂回して保存した高屋敷館遺跡（写真③）は、平安時代

後期の環壕集落で、平成12年国史跡に指定されました。現在は、保護のため壕を埋め戻していますが、壕からは橋跡、遺跡内からは鍛冶工房も発見され、環壕を有する集落の典型的な遺跡です。

平泉文化の波及　12世紀ころ、世界遺産となった平泉に奥州藤原氏の文化が栄えます。その影響は津軽までも及び、浪岡城跡（戦国時代以前の館）や新青森駅周辺の石江遺跡群が影響を受けた遺跡です。出土品の中に、中国製の白磁、かわらけ（素焼きの土器）、常滑・渥美の焼き物が存在することは「平泉3点セット」と称され、政治・文化交流の証と考えられます。

写真③　平安時代の環壕集落・高屋敷館遺跡

中世の時代を代表する地域

浪岡北畠氏　その後、南北朝の動乱を経て、北畠顕家の末孫が南部氏と安藤氏の間に入る形で、浪岡に入ってきます。北畠氏は村上天皇を遠祖とする名門であり、津軽地域にあっては唯一「浪岡御所」と尊称で呼ばれる豪族です。

領域は、津軽平野北半と外浜であり、北畠氏が編さんしたとされる『津軽郡中名字』には「行岳　本字、浪岡　当字」と記載され、行岳を「なみおか」と読ませています。また油川・熊野宮の棟札に北畠氏の名があり、今別八幡宮の再建記録、さらには潮潟（後潟）の船着場を夷島を領していた蠣崎氏に使わせたとする記録もみられ、外浜支配の状況がみてとれます。

特に重要なことは、城主であった北畠具永・具統・具運の三代が京都と交流を持ち、「従四位下侍従」などの官位を得ていることが公家・山科言継の日記などに出てくることです。

北畠氏が拠った浪岡城跡は、昭和15年県内初の国史跡となり、以後史跡公園とするため昭和44年から公有化、昭和52年から発掘調査、昭和62年から環境整備を進めてきました。指定から70年以上に及ぶ保存措置の継承は、まさに「城跡」が浪岡地域の精神的な柱石であったことの証明です。

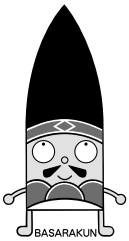
中世の里宣言　平成2年、浪岡城の総合的な調査研究と史跡整備の方向性を考えるため「今、歴史学は地域に何ができるか」というテーマの下に『中世の里シンポジュウム』を開催しました。この時期は、「ふるさと創生」事業の掛け声の下、地域の特色を掘り起こす作業をしていたころであり、当時の浪岡はまちづくりの根幹を『中世の里』としました。そして町民自ら「中世の里基本計画」を作成、イメージキャラクターとして誕生したのがバサラくんです。

バサラくんは二十二歳となりました。

シンポジュウムの基調講演をした東京大学文学部教授の故石井進氏は、ある参加者から「北畠氏の築いた浪岡城を復元したらいかがですか？」との問いかけに、「浪岡城の復元図は、現段階の仮説であり、研究の進展を図り、歴史の正しい復元を目指すべきです」と答え、安易な建物復元を戒めました。

浪岡城が築城された15世紀中ごろから落城（天正6年／1578）までの間、津軽地域には青森・弘前・黒石・五所川原という都市はなく、地図上から四市を消すと中世の地図になります。「浪岡」は中世の時代に中核的土地柄であったことが分かります。

『中世の里』の原点です。

（元浪岡町史編集委員・工藤清泰）

写真④　浪岡城は、浪岡御所と呼ばれていた